小栗外傳二編

13
204
11

寒燈夜話　小栗外傳　巻之九

東都　絳山獸醜陳人戲編

第十五編

忠義を尽して女主の身を救ふ　遺金を全して亡兄の志を果す

且説小栗助重ハ万長が許へ抑留居ること既に三五日ハも及びぬ。此中万長夫婦。さまざまに謀をなし。強く小栗を女婿とおしね。是小栗ものぶふ。やうやうと又ども。あれを辞まず。不良事生るもて。禍の身ハ及んことを懼まとく。其息子を窺ひ。蜜ハ脱まを去んとを。志ろまとども万長。その意を察しねれば。一家のうちの命令。厳重なるごと守衛しけれ。ども。隙を窺ひて居ること。一日小栗。老母ハ。ちんを近日まなく病ハ。昨ふ。今おこたりしと云ハ。斯ること。あて居ることなる。宜しき

東京帝国大学
特13
204
11

一ゆくもおぼえず。時今三月末なれば。四方の風色四時を勝とす。明日
夫婦諸ともに郊外に出て。萠芽厳を摘。花を尋ねて春遊をせんと
いふ。おもばをとゝえられば。花児は夫とともに花をうんとの嬉しくおもせ
はゝとゝ樂しからんと。あぐて此こと父母に伝へて。その免されを得て翌日
小栗花児うちたゝて。相川垂井里なんど呻吟つゝ。花を搜索菜を摘く。
樂しこと檀なり。小栗をも隙を窺ひ走去んとすれど。花児傍をまもび
詮をべかり。危角をるほどゝ。足も労をぬるがごとし。茶店に休らひて。
人の往来をうちながめ。脚夫めきたるは漢子。此茶店よりち
入り。主の翁に對し。青墓の方長ゞ行をゆかんと問ふ。翁もび
ばしたゝて。彼方に見える森こそ長者の邸。斯こゝを已こいと近なれど。道
径曲れば十四五町ばかりあるべし。此所に休らひ往きうと一椀の茶に

汲て与へまゝば。脚夫喜び茶を飲あぐ。我ホを三河国二村山の禁の者
なり。近ごろ我里に宗丹といふ人のおもゝ多く能重ごとを紙好しぬ。その人
先日此所の方々長の許よりまたるよし。甚家ようして安不を同人とうとを
府ふて使ふ来ぬと扣治をほを小栗うちなゞ。脚夫よりもう。足下の尋ねる
宗丹は某なり。家あ何事ぞ。
主あてはゝ。宜所あて見参したるぞ幸ん。足は小を辛どのうれよ出給
なりと首ふ掉る書状箱とりて。小栗ぶ粟ぶ。壺げば文箱を引ゝき
これを開ふ。果ふ縁故ありて君万長ゞ許ようゝ。せのふとを
どうぞと見ぬ。人上でゝ叶ふねこのいはどふ。免よ思ひ遠りあんこと紙
頭ふとのを外ふ細を写ぶで。小栗首を傾け。暫肘沈思してあるこ。
あつて踏首腰間の矢立を取て。懐紙に返簡を記す。脚夫に与へ。

撈ひ去しかバ。此首尾花児傍に居てきゝゐるといへど書簡に依らず記しを知らん猶ハ小栗に對ひ。いかなる仔細にあんべれぞと問へバ。家僕の詩より某が安否を問はるゝ文が何の縁故なしとさりげなく回答をなしふ。物どふさぬなれバ。花児不審かぎりなく。其書簡をみまくほしくと。小栗出簡を懐におさめたれバ。流石にみんともなしがたく。胸中くどく想ふのみなり。兎角されどうち日も西に斜になれバ。奴婢の輩かへりきぬへと催促に小栗花児もともにそとそうち連て家に還りたり。花児は前刻の書簡の心にかゝれバ。おのづから額容も餘所しからぬをこんたれ。こゝに万長が家に青柳といふ老妓ありて。よく物の心を解ぬれバ主もまたさなきものと憂たる折ども青柳も主乃為宜しからぬれバしと念ぜざればさてありけることまでも心をつくしたる。需るに今日花児はそれより還し光景をみるに心に掛と思ふからに覚えるに小栗が

彭きへ物安からざる光景なれバ若き夫婦の間なりバ仮初の戯言より云争やおこらんと猜し。花児を密なる處へ招き思ふともちの争ひやしたと問へバ。花児は耳に口をあてね青柳なればありし舞らふくを物語れバ老夫婦の間ゆへ何事を隠すべきとのわしきことといと心悪し。是を聞て起ひわるをとことありしが宗丹主のことにまかせとれ湯殿にてよく小萩と物語しありしに其夜宗丹主の閨に。小萩の者のひそまはることとおもひて故あれかふ覚えたり。おれ昔契りし女が此中絶くままなりし。前日我家に再會し。密かに謀を示し合し。脱去らし。これをおのが隠家に忍ばしおかるにあらずや。その実否を知んとおもふさバ。今夜宗丹主をかけるにあるに一度の家に送しおきまふ家人音問なきを不審。今日使をこしぬとおもはれ。甚人を家にのこし置れ玉へんこと心憂ことまれ。明日はろひを待て此一にわ招きさしめへと宣ひへ。

小萩を家に忍び入りて此の物盗ませ給へ。若小萩実に盗賊の為に他へ
連れゆく事あらば家人を害せんとぞ云教へ給へば花児かぎりなく喜び。
その夜まち柳が教へまゐらせしかとも。小栗と水戸に行て。縁故を尋ねて
思ひ寄るべき方長や花児が手前を悔て盃の回廻の書面をよくよくいひ
ゆきまゐらせ今花児らいとせよ幸なりと告ひ俄に一封の書簡認めて
花児に与へ某の家に三州二村山の麓に。如此の地方なりと細かに云教え
給へば。花児これを受納め。蜜に青柳に彼書簡を与へ給へば。やがて長文の
前よりも行有枝有葉を物語る。二人蜜にその書簡を披て見るに。
波乱日出多を送り来り那ぞ自らまゐらざは若我妻に選遣ふ
ものと斯思ふとは。多く想ひ合をるあれば。かゝる縁故にて万長の
女児と婚縁をなせり。是彼のことなれば汝に遣へと。とくと頻なり。速に

此地に来れと。写さるゝ。二人これを閲て。小萩と家冊が物語とあると云
且小萩が盗賊の為に奈落まで。とりて我妻に遣はるゝやと書ふと
思ひ合て小萩と云ふ賊天姫にて。家冊に小栗助重よりお遠慮あれ
ふ家冊ひさしく此所に止るまじ。こは奈何して宜しかんと。二人額を寄て商議
せり。茲に万長が家に旧しく召仕へる管家に万平といふ者ありて。小さき
弐用あるものなれば。万の事をまのあたりに。此事所に主に云べしとありて。二人
集ひ居る処へ来りしかく物語案じ給へる。此事所に主に何るものの如く斯云へと
の集ひ給へと問へ。主万平をして。よく前よりまゐるのこと。這般くこのこと
いかゞなりしかと小栗が出間に出て。牛の如うと語り給へと。万平出るが採
迎へん小首を傾け。暫く打うち案じたるが。膝をさすめ云へり。こは
の精しのふの差ばさられをもぼと昔にはあらんとのふぶ。如此くなり

信耗を得て妻のありかの在所を猶も
不栗

休
花兄

愚意ハ宜く謀るべしと蚕語ば三人完爾とし。ぞは良謀なり。張子房。孔明と
云らんもいかで足下の智に及ばんとうち戯れて。ともに頼むと彼去前を定めて
別れけり。不在説下再説水戸小太郎為久ハ去日主の供をして其国
討株光院の虚空蔵尊に詣たる其折から道はして。主命により他に往て両用
をたる人発しく給せしこととなれバ。宝光院に事ありて主を尋ねるに更に其
行衛を志らざれバ。兎角をはらうち日も暮るゝになれバ。宝光院の麓に宿然をとも免
なれバ其家の主が物語りを聞ケバ。昼のほどに虚空蔵の前にして這般の闘争
ありきと小栗が孤児母子を救ひとりしより。小栗万長に誘ハし走行
ほるてゝ為久その光景。主人に似たれバ必ぞ此人ならんと想ひしかバ。且よ
至らざれど旅宿を出て万長が許に尋ね行んとさすが途にて小山のがたへと紀ナ
漢子の五六人が程にして一人の女性を牽立来るに行逢より暁の星がけに

ぞろしこれハ照天姫にてありしかバ。有無をいはさず大漢子等を斬散し姫君
を奪ひ返して。事の始を聞に姫を其身の主人の事よりして今の万長が家
にその難をふくと詳に語り聞せに主君助重万長が家にあることを明白に
知たるハ姫を伴ひ行ば害あらんと恐懼れ心を違まじ。それより直に姫を倶し
三州二村山の麓に還り。主の帰るを俟ほどに三五日を経るといへども何の
音信なければ断てハいかにと心もとなく。自ら往て安否を窺まくと只今の
世中にかくは山里に姫を一人置んこと是又安堵ならぬことなれバ詮すべなくて
一封の書簡を写に脚まで厚くして。速に還りまくと主の許にまゐりたる其
回應にハ我も安心あり。時今便悪し。やがて帰らんとのことにて別のことを記さず。
姫も為久も主ことを解さず心を傷めてありけるに。二日を隔て一人の脚まで
来り。小太郎主とハこれなりやと問に。爾り小太郎ハ則ち某に。何方よりの

使者とあるに。これハ美濃国青墓なる万長が許よりぞと一封の書簡を出しを為久とりて見るに。小太郎どの宗丹と記したり。為久おし頂き封押断く読めバ。前日汝が許より書簡を寄したりし時ハ。母稚の折からふと委しく見るどいそざりしぞも。某宝光院に詣し時。此国青墓なる万長が母子を。彼の寺に詣しに悪少年の為に困しみ居たるを我見るや忍びず。これを救ひが。遂に其年まより。万長が女婿と成れり。是我深く嫌忌とし給ふれども。多くの縁故ありて止むことなく做せるゆへ。速に脱去んとすれども守衛の人多くありて。ひとへに擒人のごとし。今縁ハまた合ふにあらバ守衛の人に賂して脱出ることをいひうる手術をもし。少しの金を整へ。此人に贈り事をべし。此人のみ我に心を傾けて厚く此をそへる者也。少しも疑ふことなく書記せり。為久ハ主の筆跡といひ。照天姫に文を送るとあれど。是彼おもひあらそふに疑ふ

ながらもなりければ。脚夫に対ひ足下ハ我主宗丹どのと優恤なる人なるは。只芳志忝くこそハ今主人より申誂ゝると。只今俄に整へ難し。暫時家屋に待あしくとかなれども少しき縁故ありければ宿しかど。両三日のうちに調達してこれより送りやるべし。爾ることも妨ぐしや。脚夫その金のことあてなくべらん。之も宗丹主我家に事りなふにじ。ゆより主の女児深く懸想して。強て婚姻をなせり。然るに宗丹主の志これを喜ぶぞ。既に去んとおもひて。主これを猜し。娼妓にし。館下ふぐるとき守衛をとどめ置り。某熟く宗丹殿の光景を窺ひて。尋常ならぬ豪傑なり。然るに我主家に贅婿と成て一生を果なふ人にあらぬ。且小児の戯せごとく。婦女子の守衛をと懼れ。脱れ出ばやと思へど。一大事を心に懐きたまふ故に。今ぞこれを懼るき也。婦女をよく欺き。後難すらんやしかして。去りたまふ心ならぬ。是千金の整ふこと。

奚鼠のごとめの機を発ごとゆらめて付るべし。いざ宗丹どの。勇みたまへ。鉄城の裏に擒らるとも。脱まんと思ひのろぶ脱まるべらんや。某不肖なれども。我勇ある豪傑を募べば。宗丹殿をはじめの人々。ちあく草沢に老さてもあるべし。依て事よふれて。心寄を通じ。はかりごとされば。よくその赤心猟し。心中のこと露だにも洩しのべて。脱れ出ん便宜を識るべし。さてこそ某ごとき大半の使い頼みまゐらん。幸あるべき主万長此二村山の正用ありて。手紙脚まゐせり。今より万長ぶ主間をりて。此山の北麓まで来ありて。明朝ふたゝび此所へ帰るまじ。その時まで返簡を写あ。亟の人足下より別に使を万長ぶ汗ゆりのろぶ。宗丹どの人に届ゐどして。害ありあんよ明日某ぶ夜路に立寄を待のべくとらべば。為久も実さることもあらんと思ひしぶ。我今夜のうちぶ主の云ふ事に従ること紙。整へ亟んぞほゞぶ。労汗厭いそ。

必ず夜路に立寄のろれしと。絹を定めて別れけり。小太郎為久。脚まゐ成まゐ。まゐ。まゐとくみ首を傾けて。金の出る術を思惟して居さりる。照天姫の一室の和よめて前刺脚まの事しより。今小太郎ふく物を案ずる。非さく。を霊ひて居さりしぶ世を忍ぶ身いく目を憚て。音もせて溜より居さりしぶ。漸時移まゐ。今いくや脚まも去ぬ。去ぬらんと。静に小太郎を呼び。奴家宗兵衛よりのことみ彼よくんぞり。我まのひとりの伯父のもと命せにしまふぞよく伯父ねとあり。られば。小太郎に言ひくもべき事よめふ彼ぶ。彼主君をりて。照天の事さしちき。脚まとの御語ふよく伯父ねつんぬ。ゆえ君ふ殿のきせまふふたゝびなし照天姫のまを見よ。いくもまの事をられば。不安ふりちゆく。前刺脚夫のいひけるごとく。鉄城の囲のりとても脱まんとぼとうらいそ脱れのべぶらんや。姫ひとりあふ彼ども。我まに花児ふ香ふまよひ永く彼所ふ

居らんとて今貴家と知れる今のことを誠に終の此書簡に認めて戈角の出家をねがひて罪しまし主従の縁を断ふ仏根あらわるるやと涙まじりに

ゆるぎこそ勿論姫君よ殿おもひあてに爾る志まる波まさに此はかなるの文をこゝろみ明白あらんを縁ども姫君此ほ中ゝと来おわる事まさに

来て彼らを脱出まるんに心ならん涼くる疑ひまひそよ急まれ角まれ金を

ざよ網へまねじとさらば譬爾るに仏のおもしまさとても我を罪るひまうんとよく

做まるとうといふよ照笑も亂と静め汝ら流も道河ありいざさらば速と今の

戈用潰くん。そもまづいふまして金ぞ沉るぞ小左衛宗ほとうちいたひうへて

世の中に武士さらんのら答て飢寒ふ迫まる賊渠強盗をなるとひし

法して主君の為まれば仇るやと厭人必ず今宵のうちに金網へ殿を救ひまね

らんとて夫婦此再會とまきに事せんこと近日ありて喜ばせのくやと仏有げふ

ゆめこゝまるに照天姫鍋しても盗泉のみを飲ずとやらん汝ら今のりのしまきのふ

ぞ〻く不義非道とりて今を沉んと做まるめいとおもて流しに幸まりに決く

さまうの癖ことせそたとえ一回ハ用を做とも天道いかで免まるん忽ち悪報

を亨て奈何る禍と逢も知るべらんば夫の危難を空ばらいかで唯ままぎ

まんや爾ゆれ身に分室を色此うハ時分と告て金を網へ夫を救ひまるふせよ

と涙まぐるに仏こゝの是ぶ小左衛源ちらくと流こゝは惜き命ゆれ明日まと

ゆれ我君の還りまひて姫君の此身の上を問まるば仏と回恵ちやとえ其不肖

なりとうへと十枚や廿枚後の今ハ戈角工ばね幸やある涼く仏を惱まの

まひと明日と思へど胸夫の身ちる時もゆれば今夜の中ゆ戈角せんゆ一人

ちうとハ寂寥とも坐付せまへよと云ひ出んとを拵也式やよ行小左衛

昔時よあるまうぶ百姓の今まりこも容易戈角出まるんぶ零落まるふ

今の身あらばこそ俄に賞許の令れ出るやうやあるいとかろ〻ふ今さてのく
其ほうとあるハ如何ぞ紛れ。密なる処今いひ。不義樣道を做ふてあふこハ
身ハ擣ぐこれ室まあまで。我身を住んといふるを肯ざれば雑をぐなく此
短刀を呑めぞと。小太郎がまくあさ〻置ぶる久とてこそ〻ゑる。錦の袋ふ
入うり。短刀なれば紐を解き。鞘をぐ〻熟〻ゑ見ぶ。明光と四方に照し。
氷のごとく刃文為久如よ拵ふ。某今夜出んとまを移と癖ごとをるとを〻
猜し。身よ擣ぐこれ室を見。悪事を止めあるうんと。我で憂恤ひつる。此事ぐ〻こそ
忝し。熟〻ハ惟せぶふ主君の為とハ人の命
をとらんとをるハ我身ぐ〻も浅猿や。原来君義を做ふハ天罪ハ道ぐ〻や。
忽ち罪科ふ逃せふれん。我身の事ハ厭ハ程ど。りもの事のあるもせ姫ハ此
身よかいふん。蘭ふことあふぶ忠義よめ〻ど。不如姫の命ふ手ど〻の短刀

要ふ付のうちくふ隠けく入用の金銭へんと心を決め。あくまどはく云へうりく好
命有ぐらく我を承りの甲斐なれ此身を憂恤ひ又ハ此寶を捨けうのふ
冥加ふく畏れ。ちぶはとむふまをり。暫附此短刀を捨けうの人今青の間。を
りて金銭へく還りやうん扨淋〻くふのとも。憂を堪へく待ふくと彼短刀を
携へて。何方ともなく出行ぞり。照天ハ跡ふ唯一人ふ残方を案ぐるふ。こ角
ふ夫の身ぜうへいふみなり行ふふと思へいとぐ〻きも清く心細くもうの
悲〻さふ。日ハ西山ふ傾くとも。ふきもの。ふ知ふぬ山里ふ塒ふとる山〻鳥声も
あはれや鐘鼓の音。紫門の外面ふ住メへり。照天姫ハこれを〻寅ふ〻ふ
給ふて畏こくも。母上の忌日ぐら。香華ぐ〻ふ供せぶり。仏門の外面ふ
修行者の身ふりをるこそ幸ふれ。心ぐ〻りのくまのうちして母の菩提と吊ハへ
心とりこて何をぐるを四方をうれども。冥家ふ露ぐ〻りの物ふ見る珠

小さな所家に居て居たが。いづこに何のあるらん。定めし物と乗うまが伏なかを
とゝろの附外面に立し。修行者が。柴折戸あけて家裡に入り。いろ母衣主あるの
やさん。某るは回国修行者なれども。今日此地方まで日をくらし。宿る
ばこの方なくて。殆難義に及びいめられとあば。一貧子に情彩塔の下も厭ねば。
一夜を明さしてびんやと云ふるに照天姫さし訳きけば。修行者なれば
ふるふ齢は五十を過ぬれども。贅肉はなく。まゞ健なる漢子にて。
腰に泥を結び付。手に杖とを持。脊に負備ひ。ゆるぎなく。小腰を曲て
居たりけり。其色景の殊勝なるに。伏ゐなくて慎るべし。今家主なる人の伝に
聞たり。素より奴家は此家の人にあらず。孫の女にて。肩に負きふたゞ孫ど。
今夜奴家が志を亡人のゆゑに。這裡に入りこれが回向をなしてまゐれ。月に
至の還りさんざるに。其付よりて。こゝらに今夜の宿をなしまゐらせんまづく

這裡にゆるしあれと。懇ゆゑとゆゑば。修行者とよろこび喜び。こゝに泰かりと
安心して。祝に入ゐり。照天姫は伏どる。答意ぞやと。厨の辺とうちまもれば
修行者を。其公を猜し。某前刻志をるくよりもひ。やゝ飯をいたらわ
ばとゝびりのうちもうもいなどに。今夕へるに亡人と宜しけるがいるるに。人は
はーきとぞ。名を伝メーるられや。回向をなしてはかふさゞとゆゑ照天を
うちまもれば。実名伝告りさんに。世を憚る孫由あるゆゑへど。今日の志を恐を
母人なれど。男姑父を人回向伝なしてまゐ孫と。家扉の紙門おし引ふた。
燈明をかゝげ香を焚ゆゑ這紀へと清されば。修行者家庫の前を進こゝ西
うちゆるゝ拝を。首を上て神主をえしゝ。愕然るおりしるりしゝ。何
知らぬ獨独。ゆゑら経を読誦する。声いるるみて幾許回。鼻打ちかみ
眼を拭つ。兎角する間に経も終ぬ。照天姫は涙をぬぐいひ出ル

牙を負ふてさろぐしれ物もそぐ
おもふさまなれど今夜回回と
ゝれ。布施の澄みなすをうけおさ
あひ縁と一面の鏡を半ばに
ゝる。おいハ思ひうけぞとゝりあく
言なく。姫の形をうち守りて有りが
めをうてゝれハ今夜宿じまるを
こゝるゝ法謝と存ぞるゝいうで別ふ
賜ゝ受まゝとゝれこゝろと鏡を
ゝうてさし戻せば姫再ゝ再四ゝ
さゝがゝて修行者をゝ戴ひて熟く

着るゝ蜀江の錦ゝ裏ゝ八陵の法ゝ
これをゝうゝ頻ゝ涙を隨せゞ母ゝ
鏡ゝ受おさめ志の施物受まゝ
ゝ家主も罷ゝ
ゝれなく畏ゝれど今日をいく
ゝ頻ゝ聽ゝ
ゝ尾籠ゝ
ゝ一睡をいとなんと云ゝ
這裡ゝ入めゝ聽ゝ
ゝ家ゝ
恥かはしゝ野ゝ臥山ゝ宿

を修行の身にあるまじき物なりとよし。家主の還り来まさバ遣さんとし
なりと段々しそれを述べしと。姫の教に従ひ侍り。一室の裡にたち入て
睡りたりけり。姫を跡に唯一人修行者の辨たりくいと怪しみて待くに何
なる人にて有らんと。うち案じる折から外方俄に閙しく五三人の大漢子。
戸を押し倒し入来り。姫ハおどろき迷ひ侍り。奥の方に走入るを前に進ミし
大漢子腕のばして襟がみをむんずと捉へ引戻す。いかにも小萩所ゑるうるを。
なると脱しめるべきぞ。我をバ誰と思ふぞと云ふに照天ハ身も消く色も失せる。
だまり給ふとも。おそるくも捉へたる人を熟くうち着るに。万長が家なれ。
万平にてありしかバ。再回愕然として呆れ果る。万平呵々とうち笑ひおのれ一
我主人の許を欠落し。何方に居るぞと多くふ行衛を捜索しに志れたの
あるて告しゆゑ其ハ此所に来てみれバ。生憎に差ほど此家に居たり。

思ふに汝を奪ひし者ハ盗人といふべし。此家の主にてこそありける。名をバ何と
申ぞ。何方に隠れ居るぞとて。せし据とつきすゑて罵叫く。先ハ所く争しく
小太郎為久ハ金を調へくさぞかし姫の待ゐらんと心急しくうち
居り。我家の門辺に来るに。家裡に人のいきまく声。いと閙しく聞こ
ゆるバ。驚き侍りて走入るに。是ハ姫君を。三四人して手ごめに狼藉
に徐光景なれバ。言をもいはず飛かゝる。姫ハ捉へし万平を。どうと彼所に投
侍りけり。姫をかばうて立てりけるを。万平起をなほ侍り立上りて小太郎を熟く
と着て云へりけるは。我家に抱へし此女盗まれ侍るを奪ひかへさんと尋ね歩んで
連ゆくを妨るにや。盗人がいよく女を渡さずバ。知縣に訴へて汝が罪を糺さん
と言語あらゝに罵りしハ。小太郎。念と想へども。荒ぶる者なれば悪かりなんと
怒をおさへ言を和めて。我を斯て盗人と思ひ給ふも道理なり。我らの三月の

未つゝ。所用あつて美濃國青墓の宿を朝まだきに立て。通りかゝるなり
うらゝ。三四人の大漢子一人の女性を牽てゝ連行さゝも不審さふ。近寄る
まゝにさしうつむいて。こゝろよ傷ましゝ此女を永ふ由緒のりのうれば。子細とらこ
丈漢子を右と左と左ふ逐去ゝ。偖ひ置うて縁故を問へば。人商人ふ匂ひ
万長が詳ふ賣渡され。彼所ふあるうち不意。盗人の為ふ奪れて。この非
たらくふ及びぬと語る。彼此て音問ふく。今日まで立ち捨置て。いろ過ふ
似くれとも。勇ゝく撲道をあらばいふ。もして金銀（女性の身價
償らんと思ふて今日まで延引せり。扨又今の恩礼のと足下の身上知ふ
ざれば。盗人ふやと思ふらはゝ。なんぞ及びゝ。足下のみ水はして。
何まれ此女性を我ふ引さゝ。移まゝ其身價を幾許ぞと云ふ。万平問こ
祈ふ。是下にいふて。紙ふれと。外ぶて。せば主家のくふ盗ふて来ふ

ふれば奉ふうとあまくふめて。せゝ念を法ふ過去りし。半を除て高値せん
ともく此女性ふ主人万長尾張國へ往しゝと。人商人の幼まより此女性を
見ゝうしが。眉目容貌の美麗ふれば。娼妓よせぐやと想ふうゝ。四百貫文を
買ゝうて。体い置うて。美しふ云含しゝ。性強く。主の命に露任せざ。ふゝく
娼妓ふなるとふ。命を縮人。光景ふ。買扶じゝ。ふゝ。ふ主も殆て。
下婢とふ置う。斯ゝうふ縁故なれば。本價あてふ賣ぬべ。ほとそで
其數の。銭と換んとやゝこゝふ。小右衛門ふ云ゝ。價ふて買ぎそれ
ども今急ふ。銭出ず。付ゝ。ふ。此月の末まで行ね。万平者と左右ふうち
ふ。ふ成ずゝ。辛ゝて。漸くと。万平帰り。此女ぞ。そのまゝ足下ふ。献ず。
素まで帰らば主ふ對ひ。何と云訳あるべきぞ。是ふの事やおり人ふ。銭の
あらばふ女を渡せと云ふ。姫のまを。ふく。行んとすると。小右衛門ふ慌忙ゝく

推さる。足下の云い道理なるべし。此女性を東の間も人まに渡さるるとは
足非く〳〵我が恥なるべし。一生恩を忘るべし。離るるなたく万平と共に
額を地に付けてかきは流せ〳〵頼むあぞ。万平不審おりちあそ。いろは意さら
女ふもめれ一日二日別るとも。なぜ堪ざれば半やあれ。そもく奈何なる縁故
あてさこは云はるぞ。何ぞ包まぞ語りなべ〳〵。雑よんそこは離るべし。小一
ふとも依らぬ忍ち女性連行べ〳〵と。いろはて小を前身の上をいろんとなれば世と
忍ぶ主の身のうへ。胸苦〳〵て回廊をぐさし俯ひく居うり茶万平
これとらうと。取笑て立りけるに男と似げられ難く〳〵白痴この光景
あては金七角見出なくもばかなり。手わたりのふかく〳〵ひらひ。隙費の安益る。
やよ此家の主いつまぞ斯く居るとても。甲斐なる半あてあるるべ。之ぞ今
女と連行を金の七角渡る。其金のつて笑流の出。昔墓の宿の旅店を

万長と尋ね求よ金と女と引替にうとして手ぬと寛くと。姫のまを立て
連行をこは情なーと小太郎が止むる腕を万平が振解ふ放ち立ぬと二人の手ふ
其處へ一室の紙門の裡よりて。いろは家主ふ言りさん。今夜ぞの宿銭を
与へ給へ。ねと。碓と投出と一包封めれて捺掌の形を散せ光景よ。
小太郎はちふも云ひど姫万平も悔然と驚ひて言葉を失紙門の
裡よりて今与へ宿泊をさしかれ用を足しのと云ふ小太郎言を正。
故なれ室を得ること深く恥らふとうぐら。今危急の時なれば辞とるるく
借受ぞ。後ぬて理らんと云ひ散〳〵今を集め。数〳〵これば万平が
望む処の金七数よ。今べ嬉〳〵も〳〵戴きこは悉〳〵。やよ万平よ。こは望
の金無ゆるべ。女性とおひてとく行給と。今ぞあれば万平は恥ぶく金ぞ。
什今あるべ仔細を云ひ。女をもく与へ〳〵と連るも〳〵男を引連て外方へこそ

出行ぬ。そもく万平が此所にまゐりしは。照天を誘ひ還の。知ふぬ事なれば。奏るに。小栗は思ひ切らせ給ふ。花児と永く夫婦たらんと思せしを。小栗〳〵不意の命を受くく。姫の身代と僕ひしかば。其の謀空〳〵なりと新く。紙門のうちより

金八投与へりの誰そ。そは下回は説解を渡て知るべし。

第十六編

両雄議て居を濃州に移す

妬婦怒て怨を草廬に述ぶ

且説その時照天姫を。万平が出行後背を見送りて。小太郎はうち打ち奴に

前に出でこのべきを。万平が狼籍はなぎれて云ざるき。あんこが家に居ぬうち。

一人の使行者は宿借して。彼所に泊さし置る。只今金を投与へ。はは老定彼の

使行者はあくまでとらぬと云をうち出し小太郎はそは奈何なる所謂ありて多く

の矢令を与へやと不審ぶに。紙門を抜き立出るりの女こはいかに。

伯父なりと。後者小助が使ひ者の姿に打扮て立出る。小太郎と見るく

吹然と驚れ。ほとも言はいもどして只呆れてぞ居るれ。其時小助は姫に

對ひ平伏し。某は世家譜代の世家隷。後者小助〳〵の者と云

小太郎を顧いるに。明のとの。絶く音ばれるに伯父が光景さぞ驚れ思

我もまこと泡が姫君を傳き此所に居ることさらに不穏時どこに後ろ〳〵

ぞ。まづ某が身の上を語り聞せん。泡と家子小栗殿へ参りて后に小栗と

高瀬を召。姫君を尋まゐらせ。小栗殿と婚姻をさせまゐらせんと。只管園戸

と云ふ漁師となり。武州六浦の里に居く。只顧姫君の此方向へ捜索に

出る秋不意姫君我家に宿りの。我妻後悔ふに小栗の

大殿の妾とも知らでありしが。いろはは仔細に名告りん。姫君と名告り

継子小栗判官どの。連添人と腹悪ろ。の邪ふ。幾も姫君と

先んとて瀬戸際の上にて殆害せんとす。危きを免るゝ。兄小四郎ゝ舟ふ
ふるゝ跡にて妻子ゞ我をも殺ゝ。さて又兄の小四郎ゝ姫君なりとゝ
知りなゝせど化粧戸に隠れて。跡なく姫君なることを知りなせて先非を
悔ゆ。牙價を我にも与へ在家を捜索はゝ。此金りて牙を償ひ。小栗
どの奉ずるとゝ。それ〳〵牧ゝて生害せとゝ。ゆゑて小太郎又驚ゝ。我父死
の事嗚呼志ゝ。流涙して嘆ゝ。汝が嘆ずること
あるべし。此后の物語を聚ゝ。ゆゑて亡父の志を續ぎ。ゝれば上ゝと孝ゝ。
心を静めて紙ゆゑ筆と硯ゝ又も清りゝ。さてもまよりその今紙ゝ受
納めて行基を捜索ゝて今日此所へ巡りあゝて不料も姫君の出生家。
一夜の宿を乞ゝ兄小四郎ゝ神霊のゝ。ゝとゝもに宿借りゝ
姫君なるも我が知ゝ。ゝ亡人ゝの同向ゝと赤面ゝ流ゝ。

奈何なる法諱と神主とゝ。故殿名武名先君ゝ。婦ゝ。
さゝ姫君ゝ。殆名告ゝ。想ひゝ。家主居ゝ。
笑ゝ。小栗殿さゝ居ゝ。思ひゝ。付ゝ名告ゝ。
念じゝ。ゝ。繼ゝ。ゝ。
我ゝ。頻ゝ涙ゝ。落ゝ。ゝ。布施ゝ。
ゝ鏡ゝ北方ゝ。唐鏡ゝ。姫君ゝ。
物ゝ。何ゝ。故殿ゝ。懐旧ゝ。
ゝ苦ゝ。草臥ゝ。
折ゝ。不図ゝ。ゝ。姫君ゝ。
ゝ。恰好ゝ。姫ゝ。
牙價ゝ。難義ゝ。

兄の遺金をもて
女主の身を贖ふ

照天

万平

小十郎

小大郎

兄の最期の一念を遂る時ぞと託しける。英令をうけて投身姫の四郎を儻ふ
べし。これ偏に兄が身の科を免さしめんと平伏を姫が涙とおしとどめ世よりの
奴家を主と想ひ。さてどゆまで恙なくおはすりの。いつぞ怨こそ必竟奴家
が愚より。忠臣なるを知らずして。淋戸稽の危難の時。名告やへねゆえと
りて。非業の死をげるさしうり。こゝろ〳〵ふ其罪を奴家がうへあれぞ
かし。小四郎の靈世所を在らば。今の言語をよく〳〵深く孤忠のこゝろざし。
感謝をいつも辞はし。嗚呼悲しと云さして跡に涙を理もなし。小夫。小夫
あくまで姫の辞をうちゆへ。悲しこの中れ喜びふく。涙を拂さ云へりはは。
こは冥加なる死命なれ。只今宣あれ云語を。草葉の蔭うて小四郎が冥加
をもとや形ゝん。我らが身よまもぐとい。と畏くもありうとと幾許回が恢そし
姫の仁慈の心根を感佩しそぞ泣きくれ。照天姫が姻ゝ。涙を双の袂

もそぬ。しかひたく云つりうれ。汝等一族甲斐なる奴家を忠義をたしなの
艱苦を孤はること。小夫が今の物語を。委しく知りね。今西門不料ゆへ対
宿。幸こゝを及び。父母の言靈よりして此身を幸を下しゝの幽冥を
あつてゆ斯ぞり。神靈の在を又ぐ。陽府ゆは。さを其所ゆなど明らゆを
ゆくぞりの弓馬の道ゆ坂東よゆもゆりを武士の樓山づれよゆくと非業の
死ぞ遂のひ。さぞゆ云念ゆを在さん奴家それとも知らずして樓山を。
爾らの縁故ゆて斯ゆりうと樓山ゆ誘ひ。相摸路の稚児堂村ゆ隠
ひ。と話の首と。母の病死助重ゆ還會毒酒の危難ゆ夫婦ゆ。
そ后万長ゆ許ゆ賣度され。再び夫ゆ還舎。今又こゝゆ来ることを終りゆ
なて物語れば。小を郎も主の小栗ゆ身の上を語りゆ。小夫ゆ姫ゆ落
命をやゝゆ哀ゆ涙ゆされ。さ儀ひて居りぞ。ゆ果て后静ゆ暴ち

かゝる幾回嘆賞形して云へりゝるれば。尋ね者の女性うりせば。いかで爾る振舞ひ
堪ゆべき実や姫君の回通菩薩の授ふと承る凡なるざはゆゑまこそ。
若命を守ゑるひゝり。物語よさまぐの危きりの多ゆゝを脱まうふた
正よ足説音菩薩の冥助。かゝは慈濩のあるれば。世ゆて運も尋ぐビ。
仏樂〜〜ゆほせよと云ゑこゆゑ照天姫奴家武運はかるひゝるまゝ助を
と誘ともゆ桟山一色二人の姫討て小栗と名武の家れ寃罪のゆ仏と聖
さ后我夫再び世ゆ出ば。ゆゝとらゞ功をも賞し。夫婦ら疑今の夏を昔語
ゆゝ〜なんゆ力を助けて志まを。果さしてよ人〜と云ゆ小介も小左衛も。
首をひげて云へりゝるれば。こゝ命すでもゆゝるゞ。云此牙ハ肉醤ゆゝるる
こゝもいうで厭ゝ仏强〜ゆほせよと同急果て小左衛ハ小介ゆ指ひく
云へりゝるゆ某熟〜思惟そゞゝるゆ万平姫のゆ在家をゆゝ〜ゆ近も。

此平ゆ忍ビじゃさん半然ゝゞうゆゝゞ。
青墓の近き辺りゆ忍べーゃさゞゆまゝ夫婦ゆ再會の便めゝんまゝ東ゆ
居ゆ人〜ゝゝ蜜使をりて告知らー。足彼熟〜示合ー。本意を遂んハ
いゝゆゆゝと高織をゝのせば小介熊首。こゝきゝゆて宜湛ゝり助手君俄ゆ
万長が汗を去ゝゞ。彼を怨を懐き。小栗殿ゝゝゆと世ゆ法せゞゆまゆ
の門牙に害めらん。我ゝまゝられねゞ世ゝゝり。万長が方ゆ立職。さゝりを切て
小栗どゝゆゆ〜〜。彼ゆの光景を寃ひ。湛をりて殿を誘ゝゝるゞゝを。
伯父と甥と高織を交め。姫ゆもよゝゝゝ人郷〜し。即日三州矢立退矣法ゆ
杭瀬川の辺ゆて。かゞゝゝ好る草屋を偽ひ主從三人此地方ゆまゝの伏
居りぬ。足より前小太郎姫の守刀を質とし。少〜の今を凌ゝゝりしゝ其ゝ
りて此草屋を償ひ。ゝゝ〜。不顧且説小栗助重ゆ使を遣ゝゝゝ。只顧

生返尚とまちまちなれば忽ち使帰りて報ずるに書をとりつて三州に
生城二村山の麓にて山猟家と尋ねし小栗判官と呼べば只今は去ぬと
ひしに小栗判官の只今は去ぬと聞て用あつて他へ出行とくれば回答
明日なまじせんと笑へば行方其近辺に宿り聖名まわりの人が何地へ行
くん空しく家のみにて さふに人まば近辺の人家もいろいろ問ねさぐき
こうぶも好く まろう還りのと速く帰れ小栗いと不審使の受ゆるところ
実にもまつぶ姫も彼所へ行しまわぶ小栗判官奈何なる心ゆてさるしに
おわうこに伝ふてあらんどくめと心に念どれど乳をくれもなく 獨乳を
悩しくり さてまこと万平が豫て謀しこと相違 照天が対面をあらられ詮
なくなくて其場をば去りぬ 照天と棄てと再び小栗判官許に行く
こうふ伝方へ行くに新も色 乳をとらおくどくれくまを空しくして還

半の弥さらくと笑へども万長まぬ 乳児も本意なるのみ ありと甲斐
色し涌つれ照天が追失ひたれば小栗ぐ心ひる方もあるまじ 此上は尚その
心と湯のし永く此所に居らもあんと只願その縁をなしにる 然ばあ一日
万長が門辺に一人の修行者来り 一夜の宿を求ふ原来生産のふと
なれば清しく入く宿を乞 此修行者少しく病るよしあて逗留と乞
五三日に及びぬ 此の首夏の初みく 垣の外花咲こちて雪うと斗きぶ
山郭に音ばれて錦とそつる花の山も青葉ぶ 夏ぎきふ
小栗判官代助重 何仏なく端居して庭の面をうちえふ 春は人
過去て世はうれ夏 怒りそうるが猛然として想ふ 我此地方へ来
三春のとどめ 今卯月の首とりれば 一月に及ぶ 宿志
刃の刑光陰と空しく過ぎ 本意なさ速ふ此地方を去 照天

小吉郎ハが去向を尋ね探求国の郎若と示し合せ早く本懐を遂べけりで
さる中ても小吉郎ハ縁ある人の行きしと独とちして居りし垣を隔て
風の音にもおどろかされて立よりとぞ篠見の里に衣うつらん。
とうち吟ずるものあり小栗驚きて今夏の首して山郭公わか忍なんどの声
とこそ吟ずべきにいかなれば搗衣の詩を誦さるゝにや心を得ざることかなと
謂かけられ庭面の隅の柴折戸をひらき静に歩みよるものあり。小栗
とくと熟視るに五十にあまる翁の腰を曲めて近よりては見きれあれ某を
旅の修行者にてそふらふが少しく問まいらすることあり。此近き辺りに篠見里
とよ云のが某前日彼云ところの曲財とある小家に宿りけるが其所によし
ありける女房のありて彼女房のすゝめにより奴家がまた此辺の長者が許に
あらざる縁故ありて行往ことかなはぬを妻を奴家が此所に居るをしらぬ人ハ
下りと修行して歩みまいりけり。彼所へ宿りもしまかせ奴家が此所に居るよしを
まだしらしまゐらせし爾ハあれど此事明白に告まゐらせて夫や我身にてさろひ
かゝらんと堅くおもひしに心を得ざること思へど余儀なく頼むを足下に
せんも便なければ其ハ何とか長者にて夫婿の名をなにとかいひけると問に
長老ハ万長といひぬ夫のことハ世を憚ることあれば其名をいまさらに容貌を
如此しかじかなりと堅くしを熟く心にとゞめ諸ずべき神仏を巡礼し此家に宿り
しが足下をみかけしことなし然るに今般不図も足下がいはるゝに女房の云し
容貌に似られけり其人にてましますかと思ひまゐらするから我も先もあらで
篠見の里ハ古寺が吟じ夢と庭面の風色を詠ぜしにあらむと爾とその
おりまえやおもをと問れば小栗これを聞て奇て我妻ハ篠見の里に忍び
居るにや尚その実否を堅めと再び口を開んとする折から障子をさらりと

もし初こそ此家の女児乳児なりしを殿へとて在まさるべし最前よりとゞ保
はなびしう何の樂しとて仕りしとあるを小栗いこへ折あしき時なるこそ
ゆまれ修行者と物語せしとて知らぬまゝ人ぐさあらん雖うて此
旅人は諸國修行して巡ると笑へ國くの名所旧跡を問ひしを面白くて
想ふと時を移しうり今はもうかゝる笑ひとてもぬやよ修行者まぎ返事
又とも彩ふめといふを修行者系幼逗留もべれ者よりもどうも病
ふ[illegible]。今ここまで此家に居りたるに病おとうり果めれば明日はいとくまかり
発足の縁もいと重なれて兄奉よいるべ。只今語りのひしをよく知り止め
る人やと云はば故の処へ立入り忍ぶて小分へ程ちふ万長が許と立出産兄里
お至り姫と小太郎お連て罵くうりとまへおたさてたれる池庄司のまり
人くを小栗殿へ今は森兄里お告ふはと告ちくとやと東國のくふ

起きうるつゝを小栗助重は照天姫の在家と分る程蜜お表びとく彼お
行く安否を問ぶやと思へと其便宜と仰ざれば三五日ばかりるが漸くこの
隙を窺うしちば忍びく森兄里に往く照天姫小太郎と倉し互に身の上
のことを語りあつて万長が謀お中りしと知り。互に想へと半
急ぎ世が彼お怨を懷き奈何禍どかくんも討られ程が静と識りてこの地方を
忍ひ出んは如まゝと商議して深くも忍びく折く人の知らぬ事ふ祈ぎ
の里と通ひうり。隔てとすれど密お耳。石の物ふ世の中あれが小栗が森兄
れ里に要ふこと。知るりのあつて乳児お告ふ。乳児は此ほど小栗のうり化よ
出行を待りおりの此風声を笑ひ好き涙うなり。一日小栗の出行を窺い窟お
その後背を慕ひ行ふ彼ふ嘗ぎあの里は元山里お。軒傾き柱曲と云ふ白屋
の裡と入りね。乳児は身を潜め。直の外ふ立て家裡の事うを窺ふ。れどうと

小栗
小栗之九

小栗
小分

おばあいと絶女房と志あ女房とうち物語り。光を見るうち猛然と
嫉妬の嗔胸を迫り走入る怨のほどを云へとせーがまて弊付さはゆく
ものぐるの恥ーく語ふ女の肝日今日剛ーく人とも思られど。奈何人ぞり相載
女めあふぎくと紫折戸の隙よりてさし覗きん、着一着ふむしえ ーとた
親こと革れ。まぐのひまーれ狂れ小萩あてありこぶ。悍然として鬱るれかぐら
きんこくゆえ邪ふれうり。我夫こそ世を忍ぶ小栗判官代助重どのもく
小萩が照天姫ゆ差ひ色今きらもひあんをれが今春盗人の小萩が
奈ひ去りれへ。斯ふくんとの謀ふそ做ふる事くおばえうり。駄汰ふゆふ
我夫の志ゆまとそ怨ーそれと今ゆ胸ゆまえうゆて。紫折戸あふくもーゆ開て
走り入ふる助重と照天姫とあ人が膝を接へて睦まじく。お語ふる模間ゆ
ーゆ入ふく助重が胸の辺りと辺き抱へ声ふるして涙ぐみ。世をどもりく

化ゆ出ゆふと何年ふる志ゆふと思ひ仕ふりゆ豫てより。小萩が色香ゆ愛
ゆひ。現在の妻の奴家ゆ。露ぐらりも笑へゆわど隔ゆふゆ恨くさふど小萩を
愛恤。思ひゆく首ふり。爾くのるゆあれば斯ふそぞと宜ぐ。かりどてちゆくべる
ぐき妾とゆ色てりふとも。給事ーさんゆ奴家ゆ妻ともおばさゆ。ぐさを做ー
ゆふとおぐゆれとうち怨ぐれば助手ゆ面目ふくやさし俤ゆ回意せぐぐーて
居ふりけて。花児その時照天ゆ對ひ。奈何小萩よ今まぐゆ。口賢くも嬢めふる。
年とぐせーとゆ人ゆ主の男を疑ふくとゆ。姫女ふくでいふゆぐや。主と駄く
人でゆ色。今我夫を連行を。尚よく止めゆ支ゆふと言語荒ふゆを放ち。ワりふく
小栗ぐまとふて門立行んとまふり。さも嬉ゆ照天姫も。花児ゆ夫ゆ
我りのゆ。なさんとふれゆ怒を発ーゆ面と赤ゆしひきとめ。知ふゆ爾ゆそか
れと。助重殿と奴家とゆ。契の世ゆ夫婦ゆ。然ふゆ縁故ありて去る季秋

下旬方。武義の六浦の里ゐあれ生れて后圖戸に旬しされてゐるくと。此国ゐ賣ゐ〻ごされ。ぢんこぶ家の婢女。おとうあられて夏手を送り居しを今三年を盗賊のたゐゐ奈ゐれて。引さらをして行きりゐ。家子笑覚小を弟ゐ不去も行遭てゐり。小太郎賊を追退け。奴忠敬ひ相俱にて三河国に忍ゐゐ万平奴家ゐ在家と知り。尋ゐ求めて連ゆんと。急迫なせる。先附ゐ潜代の老僕ゐゐ来て。我身代を儀ひけるゐ。今ゐ憚る方もなく。此山里ゐ移住ゐ〻く心安きゐ不図殿のゐゐ〻せるゐ。夫婦再会をゐうるゐさ昔を語ゐひゐ〻ぐりしゐ。いそ人の夫と寐とる。婬うることを做ぶゐやゐ。ぢん心ゐ〻ゐ〻奴家をりて婬女と。笑へゐとのおかゐ〻も。斤腹ゐ〻きゐゐ。ゐゐ〻ゐ〻ゐ仮初の枕の伽とゐりし者で。妬嫉さることを正ゐゐれ。今我夫を連行ゐも。殿と奴家ゐ姉夫間よく裂ゐ〻ゐ。及ゐ仇事と発覚て。

獨去ゐとゆへゐ〻ゐ。気児いゐ〻ゐ怒を怪ゐ。情恵の妙然ゐ徇苦ゐ〻ゐの仇そといきゐ〻ゐ。其方も報の兎ゐ〻ゐ。妹脊ゐあれば我も又かぞいゐたちの兎ゐを禀婚縁色ゐ〻ゐ良くゐ。さ月ど大ゐの男ゐ〻ゐ。妬も放もきゐ〻ゐ。其上もゐ〻ゐ奴家をりて。主て色と思ふゐ。今ゐ身價儀て那て居ゐも暫時でも。我家ゐ仕へ婢女ゐれ。爾ゐ兎ゐ古主ゐゐ〻ゐ。其古主ゐにさゐなく。不礼を云ゐそ奇怪ゐいで生四財ゐ秘ぞやとゐ〻ゐ懷剣を抜ゐゐ〻ゐ斬ゐれば。小太郎あらやと飛ゐて。ゐて押へて腰下ゐ敷最ゐゐして姫君ゐ。ゐ〻ゐ不礼をゐ生ゐ〻ゐど世を忍ましゐ生ゐ。荒ゐ〻ゐ〻ゐ悪ゐと。ゐゐ〻ゐ兎ゐ〻ゐも兎生ゐに尚も不礼の飽ゐで白刃をりて大膳ゐも敵對をゐていゐで。兎ゐん世ゐ世の附ゐあゐゐ〻ゐ。おのゐ〻ゐ云治を。かけゐ生ゐゐ方ゐ〻ゐ〻ゐと畏ゐ〻ゐも姫君ゐ清和の帝れ

は未だ。此父上は人も知る。常陸國の一堺主。名武常陸介なる光君ぞ。
はーあさそこ又我良くと宣つさえ則ち汝ぶ恵暴ふ殿を誰とぞおりへ。
関東ふ此武名を裏じ。ふ若大なる小栗判官代助手ふと知るやちふびや
浅女よ。斯る大ゐを受くとれいとても生ーおるれーどれらう憐汝奈ひ。
胸の辺ふ。められば照天姫は慌忙。そのくまをーー止め大ゐを受くるは女
かれば。生おくとふは我良くの此刀の上を漏さんと思ひさとして爾をちらめ
こは道理よたべれども。一回殿ふ添即せーー女ふあれば今此而七殺さば奴家ゐ姫
あて。おとふ命殺さーねと。人の誹謗は厭ふるど殿のおぼさん行ふも悪ーまぐ
生ふ人ふ奴家ゐ彼ゐ家ふ買ふれ。彼ゐ付も主と教ふる恩義もあるば
止ゆ。今更めて道理をよく云ゆさは聴ふて。化ふ漏をともあるまーゐふ助
ゆくて汝ゐ己ねと云べど小左郎ふを振鳴呼愚のゐゆと宣ふーまー大功は細位と

顧ざとふ。やさどや昔佐々木高綱は義戸の渡を先陣せんと合戦の夜ふ
一人義戸ふ忍び行海士を欺ふ渡船を使ふ又異人ふ教ふと。ふ浅ふも海士
を切害ふてその翌日浅瀬を渡ふて先陣ー数百歳の今ふても笑ふ。
いろどやそこ退ふ姫君と少ーも肯ふ。姫は化ふも留めるつ。ごと
声を荒らげて汝ふふも爾ふるーーら女人と助くとも。さゆでの害はあるば
まれど女の主は命ゆ忘斯は辞ひとまばえうはしく奴家を捧ふば。鬼角ふ
ふまろせよと怨ふる言語は小左郎も後の害ふは想へども。主命乖がーして
遂ふ花児を免ーくろ。花児早くも身を起。照天ふ對ひ涙を拂ひ悲しく
宣くと云化つふは偽ふて実は奴ふを責ーて殿と二人心ふ繁まんずる下心。
と精ふ差ふば殿も公のゐ孫は昌く他ふる花を愛ふ此方はいろ秋風
の吹ちる紅葉ふ色失て疎ふふ情は姿仇ある人ふもせよ。命の陸は及ぶをて。

そ知らぬ顔して初うの言結も半ばまでいひ合ひ。奴ふと殺さるべき。
ユまでぞ付らめ。おまうの騙殺さんうの。只速よ殺してこそ此世うてハ恨晴けん
この雖られば死して見ひと思ふ甘んと。嫉妬の怨ず一念の悪鬼とうん光景く。
助重言結を正しし邪める心ふ夫婦うと従かわど斗で恤ふ心を変下ふ
ちて爾ふ悪言とかるるの。ひと愚うりく。実我をふうふ。今日世ゆして
ゆ。ひと人ふ漏さで時節を行ば。再会ふ期もわどとく世ふを去りく
と。強く半ば柴折戸の外面ふいろ万平が立ゆ去るふ助辛ぶ新ん合して
悔蛙うり。其時万平。幼児ふ對し腹ふちまふ道理ふ。彼ふ夫婦ふ従ふ源
ごとのそいと悪。今うりちんと家ふ住ひ。万長殿と示合せ。小栗夫婦
ふ従ふ此平ふ法として居るふと。鑓会ふの〻訴ん。いざまくやと決めつ。幼児を
脇負ひ一散に青墓さして走行ば。小太郎驚ふて歯切を。某流あやふと

耐ふう怪ば目前かゝれ大事ふ及びとり。万長怒りて通金之所出ば怒ちふ
ひ牙の上ふ及ぶ。ふ免を業り遅ずひて。彼ふ二人と仕留んと云捨行を
照天姫慌忙呼とめ。万平ぐこと角も角も汝ふ為ふ。幼児を
暫時も我夫ふ添申ちふ。ふのうれば。ひ乱を母とやを体。爾ふ成あく
なく殺さんハ。奴家奴ふて做ぐ。夫のもばさんとも憂。此ふよくく
と〻ふを汲よと。ふふ小太郎うち頷。命ふとふ道理ふ。ふふも幼得
ふと。云ふ二人ふ後殿を追ひ。逸足出して走行きり。

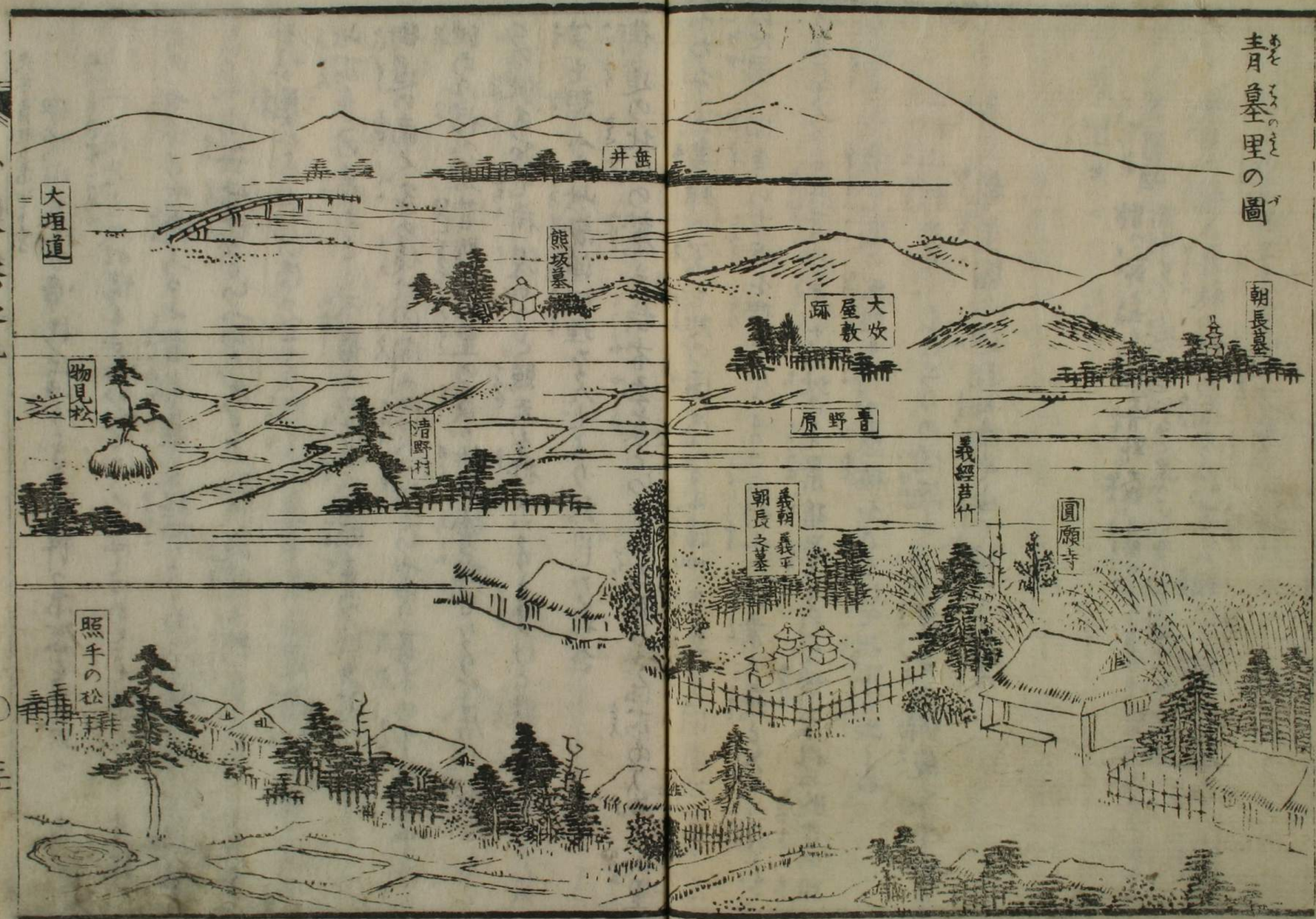
書肆衆星閣の主人曾て山水癖好む癖あり。生涯の眼目四方を遊歴
志て名勝の地を尋ね毎其地方の風色名産古器を摸写して以て
土儀とす。年年予今年寒燈夜話を編述し後帙第三巻を
三州二村山濃州青墓の里同赤坂宝光院の事を僅に生せり。既に
稿を脱し衆星閣に寄て閲し予に謂曰僕遠方乃
事を知ること少し。今此書に載る三州濃州に既に踏り。粗
その風土を知る。先生の述ること如此其方位大に差へり。こゝを以て
想ふに先生の如き人世に又多う有べし幸彼地方の地図名産を写し
給へかしのみ。今此書の因に生じ知ること人に告らしめば益
そも又害なくん。願くは足が考証して此巻の後に生じ給へと云ふ。
此書の大旨に関らざることあれども衆星閣の老婆心を察し給へ

わかゝ書肆の家を処の図に入る濃州青墓里同赤坂宝光院
の地図と同寺の古瓦を摺て体とす二村山の紅葉と歌と共に載せ
られたるに其昔の事その地の光景推量られて憐なれば蛇足の誹
を忘て衆星閣の玄処に予が愚按をかうけて世に出す。
二村山杵とり。ことさらの図説を予が管見の僻説に余
多く衆星閣の述る処にして少く補ひしのみ。

主旨墓里を

美濃国昔は二野と云り此国は青野大野。各野せとて大きなるこの郊原あり
爾号はとは迦江を江のどのふがごと今は宗を撰く美濃とあり。
垂井の驛と赤坂の驛の間なり。むかしは賑ひし驛なりしが今は小里と
なりぬ。青野が原も此地方なり。

青墓里の圖



夫木青柳の歌にあり。

伊吹山さしも帰ぬるほどきとまる所の名をあとゝする　為尹

拾玉集墓を

一夜ゝ人妻情あるちかくるとうふ　慈法

この奇をもりて考るに昔墓を拵女などありし驛なるべし。同里の

うちに。小笠弗塚とゝふあり。此里に照くまといひし遊女あり。

それが墓なりといひたゝへさとり。照くまが墓を東海道藤沢の驛とのこ。

此所にもこの墓あること不審。その比あまの照くまありしゆゑ。

街道の南人家の後に田間に。照天の松とゝふあり。其木の下にさゝ井なる

池あり。俗ゝふ。昔照天此里の長ぶ許に。嬖婢となりて居し附日毎に

この池にあそび七荷汲ありと。照天を拵女なりと。多けど。嬖婢なること然

笠を想ふに此說淨瑠理なんどより起りしなるべし。

街道の北山の麓に長者塚とゝふ。木立あり。ゝ石あり。是八州里

の長者大炊ぶ住ゝる跡なり。平傷に朝長の墓あり。昔平治の亂に源の

義朝戰負ゝ。僅八騎にて此地方に落ゆくぬ。この地の長者大炊とも。

義朝交り深ゝ所に止まり。冠を報ゝん討義を做ふ。

斯ゝ居ゝんを然ゝるに義朝を尾張に行き。義平が弟禪に赴た

朝長を信濃に下て。東山東海の源氏を語ゝ。不日に軍兵を催ゝ。

食檀の恥を雪ぐんと。既にうちたゝんとも。然るに朝長矢傷ゝ

起て社に義朝これをゝ甲斐なしと贖ゝ。蜜に刺ゝ殺ゝさせ

ゝて則ちその屍を葬ゝ。ゝ里人の語ゝ。

街道の端に圓願寺とゝふ。庵室の如ゝ寺あり。其境内に義朝。義平。

朝長三人の墓あり。石の五輪なり。

同寺に後に義経の芦竹とて弗林あり。

街道の北相川の方小寄にて西の熊坂塚とて小堂あり。熊坂を軍
ことを昔名高き盜賊なり。世のよく知る所なれば こゝに贅せず。
ちかゞゝ南の方青野ヶ原の左岸町ぐろに青野の一本松といふ有本名
幣懸松又の名代物といふ昔朱雀帝のころ東夷
平將門王命に叛き。下総國相馬郡に居住して乱を發せしに是
退治しまゐらん為。尚國中山金山老太神に願ひ此松に
より。幣懸松と賞し。後遠の星霜を経て。仁安加悉のこ絶わひ
泉林の株梁熊坂長範といふもの。此松に集へて。
旅客を劫し。其賊物を奪ふ常に此松によりて旅客の多くを害し
ぞ。それよりして物見松の名負う。古の幣懸松の美名を賞せられ
今物こそ松の坊名あるに此木の不幸とつゞし。古代の松を正徳年間

大風のために吹倒されて枯れ松。その後植継ぎ松大木となり
枝葉栄えこの。
右に生を慶の青墓の園説を。衆星閣生業のため前年此
地方をるつし折ら天性の癖ありしつゝ人のまを書写たるを
粗略社撰ふる年なきにもあらぶ。その賈人の俄比の執筆
なるに其誤りをぞ正しく。

金生山寶光院

濃州青坂の驛北。山上にあり。真言信義寺領十石。本尊虚空藏
菩薩大巖の中に安置。弘法大師の作風基も同じ。毎年三月十三日
法會あり。

赤坂
室光院
虚空藏
山上の
圖

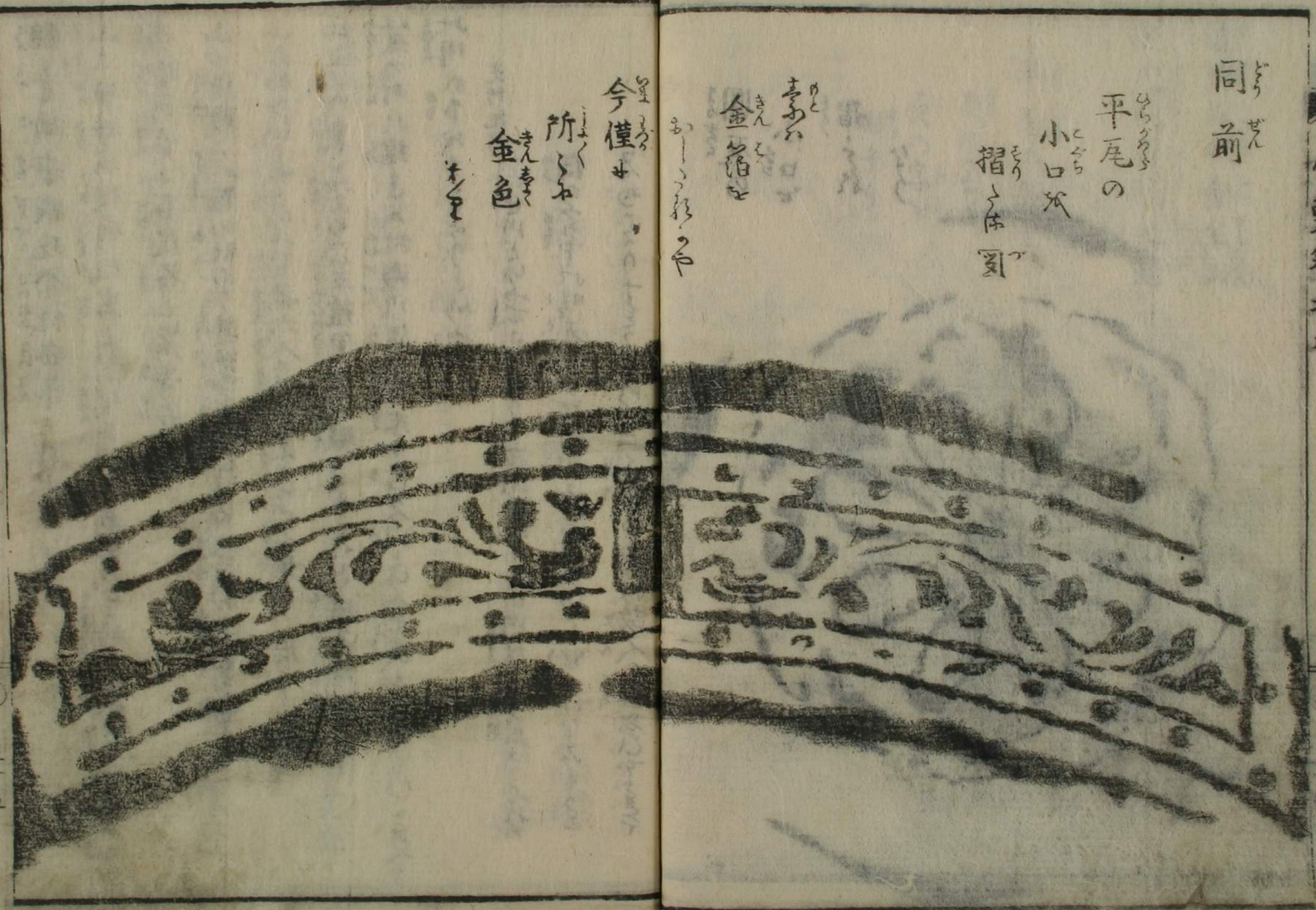
濃州赤坂金生山
宝光院古尾之圖

平尾の廟
方れらちゃ
矣の字を
彫り

圓尾の
小口を
指し
なり

同前

平尾の
小口式
摺り体図



真の
金箔を
おしつけたる

今僅か
所々に
金色
残る

鎮守御嶽權現祭礼毎年三月十一日なり。
山上本堂の後屏風岩といふ峻奇の大巖あり。手傍より鈴石と云物を出す。
本堂の前に百足石といふ奇石あり。
山の中腹に八幡の社あり。其拜殿を北へ行けば。谷汲の訛音へ出る。
山の西をしゝやといふ昔孫六入道兼元といふ名鍛冶の居る所なり。
山上より東を望めば。笠縫里などは眼下にみえ。風景殊勝なり。
樫の町より端まで。杭瀬川流る。是未だ呂久川といふ土民は今世いかこと云へり。
此川は下流さらさらと流る。

光行紀行
名せ川といふ所にまりて。夜ふけぬれば川端より出くるなれば。
稲の穂中は時雨きたれば川流れ。ひく。寒月なれもうと
見のなりすとうたりし。二千里のわかれ故人の仏名ひかるまて

旅のおりしいとぐあさ人がさく笠もぬれぬ。月は影に笠はぬれつゝ。
笠源を出て三日杭瀬川に宿して一雪ちむくゆきんの仲秋
こゝに秋の月はいまこそあらぐく幸を情を前途一千里の雲に道
などある家の障子に書はるるはいかゞ。

富士紀行
ちゝさりし秋のまれと雪もかゝ体旅疲れ月をえむとて
久さ待ち雲なとくしこの名は杭瀬とあそ船やはるゝん　竟孝

尾州紀
名所杭瀬川といふ所を過ぎ中をわたりて
波寄ゆきくに海のれ杭瀬川月のうさはもるや待とん　惠良

右の出る所の図説も前に同じ。

二村山。三州矢矧の里近き地方なり。一名を丹波尾張といへり。古名西こ。

歌の続くをもまくてげ二むらとも。御旨の蓋とかけり。又唐錦ふさひくを。錦を一むら二むらといへるこそ是のやうに見られたのるを続あり。

景物

岩躑躅　時鳥　照射　ちさと

紅葉　振　麓の萩　ちこ鳥　里

○慈ふ歩と紅葉ふ書肆衆星閣二村山と

ちてしに其紅葉を紙に摸うと。

ちまく摸写しうれし。

○カヘテ機樹し。楓の字ふ。かへてと読ん誤ん。

和名抄ふ雞冠木をかへてとよあり。かへてとふるい。

ちを葉かへるのくまふ似るゞ故し。雨ちがかへるでともらへア。品類

甚多く。貝原氏の大和本艸ふ二十餘種とらへれと尚多くく。

此萩も二村山の産ゆて衆星閣の持まるりのし。

和名抄及漢語抄ふ鹿鳴艸萩とさくわぎと訓せり。

萬葉集ふ牙子。又榛とかてちぐと訓を。

貝原氏の大和本艸ふ天竺花と書てちぐと

假名をつけり。其条ふ花史を引く。

觀音菊を天竺花是しと以へを。

本邦和歌ふ多く萩を詠り。

唐山ふいとをと賞せざるもの。

萩と頸を花の待を図を。

有や否

是より後の三國を衆星圖の所載よりあらぶとらくども。二村山の
因ふ拵のことを弁ずは幼童のるこゝを生せり。

柞。字彙。才落。子各。二切。木名とあり。
詩桁其柞薪といふ註ふ柞樵ことあり。
貝原氏の大和本草ふ蠶子木と
書て一名柞といふ。假名をいねつげと付。
字条ふ柞を英楊ふ仰く。掃ふ
作。人庭園ふも植山木し。
平原ふも生を。奴拓をいねつげと
訓ずは非なり。
本艸ふ合ずとあり。

○ととろ説くあり。かはとろ。ゆく。ゆうあとろ。
など云ひて定りがたし。和名抄ととろと載せ。
字類抄ふ雀の字を。ととゆうと訓じたり。
楊子方言ふ桂林の中謂雞曰雀と
又さう字彙ふ雀才桊切。
有楚人雞を雀と云とあり。
きろあ日ど古化おふ
ふてくと帝よしと讀ふ。鶏翡
翠雞ふとの歌ともえくど。
今世の何るゆうあくん。珍物の
君子ふ図て後日詳るゆと述ん。

○とりハ照射ともゝ火庫をもさ
闇夜ゝ火庫をさして鹿の身をと
うがひ射どるものや。

金葉

沢みゝほたゝの影は
うつれるとこそとりとめや
鹿を帰らん

千載

とりさそれやとりを妻とおもふらんや
あひこゝく鹿の身をかふらん

右の歌をよそおりゝ。

小栗外傳巻之九畢

江邪文庫